

事例をもとに議論し、 経営のために会計を使いこなす力を身につける

2018年度春学期ティーチングアワード受賞 対象科目：財務会計（夜間主）

早稲田大学大学院経営管理研究科（WBS：早稲田大学ビジネススクール）は、実務経験を持つ社会人を対象にした専門職大学院である。「会計を経営のツールと捉える」というコンセプトで行われたこの授業は議論中心で進められ、「学生と未来を共感できる場」が実現したという。

会計を「経営のツール」として使いこなせるように

受賞対象となった「財務会計」は、WBSにおける夜間プログラムのコア科目として設置されており、履修生の平均年齢は30歳。多くは7、8年のビジネス経験を持つ社会人学生である。WBSは商学学院に設置されているが、学生の出身学部はさまざま。「商学部の学生と違って、簿記や財務には苦手意識があり避けてきた人が多い。しかし、会計が分からないと経営管理者にはなれません。ですから、会計というものを経理担当者のものでなく、経営のためのツールとして教えるというのが私のコンセプトです」。

経営を学びたい学生に一番響くのは、「経営管理の中で数字が使えるればそれでいい」というメッセージだ。「企業の経営活動を総合的に包括的に捉えることができる唯一のツール、それが会計です。儲かっている会社の会計数値を分析すればどんなビジネスモデルなら勝てるのかが分かります。そして、自分の未来構想を貨幣価値に落とし込むのが経営計画です。つまり、戦略を立てるのも実行するプロセスもすべてに会計は使われるのです」。

数字への苦手意識を持っている人に対し複式簿記



山根 節

経営管理研究科教授

などテクニカルな話から入ると、途中で挫折して数字が使えない経営管理者になってしまうと危惧する。「最初の1時間は、まずなぜ会計を学ぶ必要があるのかを納得させるための話をじっくりします。経営と会計は別物と考える人が多いのですが、経営管理と会計を結びつけて考える癖をつけることが大事だと伝えています」。

その上で、たとえば商品の売上とそれを売るためのコストはどれだけかかるか、いくら売り上げれば儲けができるのか。そういうことを計算するのが会計だというような身近な話からスタートする。「彼らが現場で積み上げてきた経験や日頃の悩みが会計の数字と結びつく話をすると、ああそういうことなのかと納得します。心理的なハードルを取り除けば、苦手意識を持たずに数字を語れるようになるのです」。

**事前のミニレポートで自分の考えを固めて、
議論に参加させる**

授業には、実際の企業経営の実例を教材に自分ならどうするかという視点で討議を行う「ケースメソッド」の手法を取り入れている。たとえば、Amazonやトヨタなどの資料を材料に、その会社の強みは何か、弱みは何か。自分が経営者だったらこれからどうするべきかを議論する。「古い資料でも教材の価値が落ちるわけではないけれど、できるだけ最新の資料、今光っている企業の例を扱うことで学生たちはものすごく腹落ちして、結果的に自分たちにも適用できるノウハウが溜まっています」。

議論を活性化するために、事前に討議材料を配っておき、それを読みこんだ上でミニレポートを提出することを義務付けている。「他人の発言を聞いてから考えるということがないように、予習によって自分の考えを固めてから出席させています」。

議論しやすいように馬蹄形の教室を使っているが、70人規模の授業のため全員が発言できるわけではない。「発言が多い人は決まってくるが、すごく熱心で、授業が終わった後もわっと質問にやって来ます。夜の授業なのでそのまま外に飲みに行きつづきの議論が白熱することもあります。若い人たちの柔らかい頭で発想することは“そういう考え方もあるな”と私自身も勉強になるし、とても楽しいです」。

学生たちとの交流は卒業後も続く。集まりに呼ばれることも多く、個人的な相談を受けることもある。「相談されるのはうれしいので、思いつくアイデアは惜しげなく授けます。最新情報を持った若い連中から相談してもらえるのは教員冥利につきますね」。

そもそも、ビジネススクールに来るような社会経験のある学生に対して一方通行の授業はナンセンスだと考えている。「ある特定のテーマなら自分が演壇に立って話

ができるような人が集まっているなかで、それぞれが蓄積した経験を彼ら同士で交換することができたら、もう教員なんていらないうらいです」。

学生が求めているのはモチベーションのきっかけなのだという思いもある。「たかが2年間の授業でビジネスが分かるなんてことはありません。勉強することがおもしろいという実感、勉強すればいいことがあるという確信を持てたら、ずっと勉強し続けるでしょう。そういう努力を続けられるように仕掛けるのが私の仕事だと思っています。そう考えると、会計を教えるということを通して、人生を語っているとも言えるかもしれませんね」。

自身も早稲田大学卒業後に慶応のビジネススクールに学んだ山根教授。「自らもビジネススクールの学生であったという経験は、教える側になったときに大いに役立ちました。どういう授業が良くて、どういう改善が必要かということがユーザー目線で分かりますから」。

この授業では学生たちとの議論を通して共感できる未来を語り合えたことが一番の収穫だったという。2018年度いっぱいWBSは去るが、WBSでの5年間の日々は「毎回授業に来るのが楽しみだった」と言うほど充実していた。「学生からは、先生の話聞いて元気が出ましたとよく言われます。でも、私の方も彼らからもらったものは大きかったと思います」。